

# 「書く意欲」と「書く技能」を高める指導法の研究

## ～意見文の授業実践を通して～

熊谷市立新堀小学校 教諭 小川 祐太郎

### I 児童の実態と主題設定の理由

令和3年度の埼玉県学力・学習状況調査において、本校の第5学年の児童は、「書くこと」に関する問題の正答率が低かった(図1)。「条件に沿って自分の考えを決め、その理由を書く」「目的に応じて理由を挙げながら自分の考えを書く」等の記述式問題の正答率が低く、市平均を下回っている。日ごろの授業のなかでも、自分の考えと理由を結び付けて筋道の通った文章を書いたり、書く内容の中心を明確にして、内容のまとまりで段落をつくったりすることを苦手としている児童が多い。

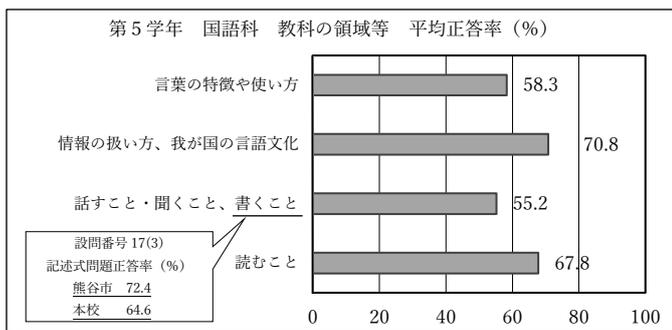


図1 令和3年度埼玉県学力・学習状況調査 結果

また、令和3年度に筆者が担任した第5学年の学級において、4月に国語科に関する意識調査を実施した(表1)。

表1 国語科に関する意識調査 令和3年4月実施

質問項目	児童の回答
国語の学習は好きですか。	好き：71% 嫌い：29%
国語のどんな活動が好きですか。	話す・聞く 好き：52% 嫌い：48% 書く 好き：8% 嫌い：92% 読む 好き：70% 嫌い：30%
書く活動が嫌いな理由	・書きたいことがないから。 ・毎回、どう書いたらいいか分からないから。 ・一人で長い文章を書くのがつらいから。 ・何を書いたらいいか分からないから。 ・個人の活動が多いから。

その結果、「国語の学習は好きですか」という項目では、7割以上の児童が「好き」と回答した。このことから、児童は国語科の学習を概ね肯定的に捉えていることが分かる。一方、「国語のどんな活動が好きですか」という項目では、「書くこと」の学習活動につい

て9割以上の児童が「嫌い」と回答した。「話す・聞く」「読む」の活動と比べると、極端な結果である。「書くことが嫌いな理由」の記述や今までの授業展開から、児童が書くことを遠ざける要因は次の3つと考えられる。

- 書きたい気持ちや書きたいことを持つ前に課題が提示され、書く意欲が高まらない。
- 書き方が分からず、書く活動の見通しが持てない。
- 一人で行う学習活動が多く、文章の質が個人の書く力に大きく左右される。

児童が苦手な嫌いな「書くこと」の学習であるが、そこで育成される資質・能力はすべての教科等の学習を根本から支える重要な力であり、学力の向上には欠かせない。「書くこと」の授業改善は、本校や本学級の喫緊の課題である。そこで、「書く意欲」と「書く技能」を高めることを目指し、研究主題を設定した。また、そこで身に付ける資質・能力が様々な場面で生きて働く汎用的な力となるよう、深い学びの視点からの授業改善を行う。児童の実態を踏まえ、授業実践は、自分の考えを明確にして書く意見文の学習で行うこととした。

### II 授業改善の視点

本研究では、児童の実態や「書くこと」が遠ざけられる要因等を踏まえ、次の3つの視点から授業改善を行う。

#### 1 書く意欲を高めること

香月(2020, p.17)は書く内容と書く意志について、以下のように言及している。

書くことは書く以前から始まっている。当然のことだが、書く内容が見つからなければ書くことはできない。その逆に、書く内容が見つければ、書こうという意志も湧いてくるし、書きたいとも思える。

つまり、書く内容が見つければ、児童は書く意欲を高めていくというのである。確かに、書く内容が見つからない状態で教師に「書きましょう。」と言われても、児童の書く意欲は高まらないと考える。

そこで、授業では児童が書きたい内容を見つける時間を確保する。また、学習や書き方に見通しを持ち、

学びを実感したり手応えを感じたりできるような工夫を取り入れる。さらに、「書くこと」は個別性の強い学習であり、それが児童の負担感を増す要因だと考えられるが、逆にその個別性を生かして児童の意欲を高めたい。自分だけのテーマで文章を書くことで、なんとか相手に考えを伝えようとし、書く意欲が高まっていくのではないかと考える。

## 2 書く技能を高めること

書く技能を高めるためには、書く活動を繰り返すことが重要だと考える。筆者の「書くこと」の授業は、文章を1度書いて終えてしまうことが多かった。

そこで、相手や目的を意識させながら、単元のなかで3回は文章を書かせたい。また、児童が書き方を理解する時間、文章を推敲する時間を確保する。さらに、友達との協働的な活動も積極的に取り入れる。個別性が強い書く活動では、文章を見直すために他者の視点が不可欠だと考える。

## 3 深い学びを実現すること

様々な場面で生きて働くような書く技能を児童に身に付けさせるためには、深い学びの実現が不可欠だと考える。本研究では、深い学びを『「言葉による見方・考え方」を働かせた、習得・活用・探究の学習過程を通して、国語の学びを自覚し生かせるようになること』とした。目指すのは、児童が学んだことを自分で使える（活用できる）ようにすることである。言葉そのものを学習対象とする国語科では、児童が言葉の意味・働き・使い方等に着目して考え、習得・活用・探究といった学習過程で問題解決をし、学習内容を振り返って知識を結び付けていくことが、深い学びの実現につながると考える。そこで、次の3つに留意する。

### (1)児童が国語科の「言葉による見方・考え方」を働かせる工夫をすること

児童が意見文について、言葉の意味や働き、使い方といった「見方」で着目し、捉える・問い直すといった「考え方」を使いながら、理解・表現することに留意する。表面的な内容に止まらず、文章構成や表現の工夫といった言葉の働きにまで気付き、理解させることで、他の書く場面でもその見方・考え方を働かせ、学びを生かせるようになると思う。

### (2)学習過程のなかで、習得・活用・探究の場面を明確にすること

基礎的・基本的な知識や技能を習得する段階、習得したことを活用して課題解決をする段階等を意識して指導する。探究的な活動は、単元を通して行うようにする。習得した書き方を何度も活用しながら、よりよい文章を探究させることで、より汎用的な書く力が育つと考える。

### (3)児童が知識を結び付け構造化する工夫をすること (知識の構造化)

児童が一つ一つの授業で学んだ書き方の知識等を結び付け、構造化する工夫を取り入れる。単元の終末には、すべての授業で学んだ書き方の知識等を振り返り、結び付けて整理する活動を設定する。そして、学びを意味付けたり価値付けたりしていくことで、児童は学びを自覚し生かせるようになると思う。

## III 研究について

### 1 研究の仮説

仮説1 書きたい内容を見つけ、学習に見通しを持ちながら、学びを価値付けていく授業展開を行えば、児童の書く意欲が高まるだろう。  
仮説2 言葉による見方・考え方を働かせながら、協働的な活動のなかで書き方を習得・活用・探究させることで、児童の書く技能が高まるだろう。

### 2 研究の方法

熊谷市立新堀小学校の令和3年度第5学年24名の児童を対象に授業実践をし、その成果を意識調査や児童の文章、振り返りの記述等をもとに分析する。

### 3 授業づくりの方法

#### 【仮説1の視点から】

#### (1)一人一人が固有のテーマを持てる課題の設定

児童が本当に「自分の文章を読んでもらいたい」と思って学習に取り組めるよう、一人一人が固有のテーマを持てるような課題を設定する。他者が知らない自分だけのテーマであれば、どうにか分かってもらおうと工夫して文章を書いたり、粘り強く書いたりすると思った。

#### (2)書きたい内容を見つける「0次」の設定

単元の学習が始まる前に、書きたい内容を見つけたり、固有のテーマを決めるきっかけになつたりするような活動や取組を行う「0次」を設定する。書く内容に関する掲示物を掲示したり、書きたい内容について詳しく調べさせたりすることで、単元の学習の前から児童の書く意欲を高めておくようにする。

#### (3)モデル文と学習計画表による学習内容の明確化

どんな文章を書くのか・どんな書き方が必要なのかを明確にし、児童が学習や書き方に見通しを持てるよう、単元の初めには教師がモデル文を提示するとともに、それを児童が分析する時間を確保する。児童が言葉の意味・働き・使い方等に着目してモデル文を分析することも重視する。さらに、学習計画表を教室に掲示し、児童が常に学習の見通しを持てるようにする。

#### (4)学びを価値付け、蓄積するポートフォリオの活用

→【深い学び(3)】

学んだことを振り返り、自分の言葉でまとめる活動を毎時間行う。また、単元の学びを一目で確認できるポートフォリオに記入させることで、児童が学びを実感して意欲的に学習したり、学んだ知識を結び付けて構造化したりしやすくする。(図2)。

図2 振り返りを記述するポートフォリオ

【仮説2の視点から】

(5)習得・活用・探究の学習過程を基にした単元構成

→【深い学び(2)】

書く活動を繰り返すことや深い学びを実現することに留意し、探究的な単元計画を作成した(図3)。

0次	書きたい内容を見つけ、書く意欲を高める。	探 究
活用	既習やモデル文を確認して、今の力で自分のテーマの文章を書き、必要な学習内容・書き方を知る。学習の見通しを持つ。	
習得	文種ごとの書き方を知り、教科書教材等の共通課題で文章を書くことで、書く技能を身に付ける。	
活用	習得した書き方を生かし、自分のテーマで改めて文章を書く。	
探究	探究してきたことや学びを振り返り、よりよい文章について考え、話し合う。自分が学んだ書き方を整理する。	

図3 習得・活用・探究の学習過程を基にした単元構成

学習前の「0次」の段階では、1か月程度前から書きたい内容を見つけ、書く意欲を高める。単元の初めには、既習やモデル文等をもとに文章を書く「活用」段階を設定する。まず初めに文章を書くことで、何を学ぶ必要があるかを児童に考えさせ、学習の見通しを持たせる。「習得」段階では、教科書の教材等を使った全員共通の課題で書き方を習得し、そこでの学びを生かして改めて自分のテーマの文章を書く「活用」段階へ向かう。「探究」段階では、自分がよりよい文章を探究してきたことを振り返り、知識を結び付け、学びを確認するとともに、さらによりよい文章を考える。「探究」段階は、単元全体の探究活動を確認する時間である。探究する活動そのものは、単元全体を通して行う。この単元構成は、児童に3回文章を書かせる。学習の見通しを持ちながら繰り返し書くことが、書く

技能の向上や深い学びの実現につながると思う。

(6)3色のサイドラインを使った推敲の充実

→【深い学び(1)】

児童が「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉にこだわって文章を練り上げられるよう、3色のサイドラインを使い、推敲を行う。文章の中にサイドラインを引くことで、児童は自然と言葉に着目すると考えた。よい表現や書き表し方には赤、文章の間違ひには青、言葉の意味・働き・使い方が気になる部分には黄色のサイドラインを引く。色の使い分けについては掲示で明確に示す(図4)。多様な視点から文章を推敲できるよう、友達と協働する時間も確保する。



図4 推敲する際の掲示物

IV 授業実践(令和3年10~11月 第5学年)

1 単元名・教材名

世界遺産を守ろう～結集せよ意見文～

『世界遺産 白神山地からの提言』(教育出版)

2 教材について

教材は、白神山地の概要について書かれた文章と、白神山地の自然保護に関する7つの資料で構成されている。資料には文章、写真、グラフといった多様な情報が書かれており、児童はそれらに関連させながら、意見文を書くための考えを形成したり、考えの根拠となる情報を選んで活用したりする。

3 本研究に関わる単元の目標

- ・事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)ウ
- ・言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

4 本研究に関わる単元の評価規準

思考・判断・表現
①「書くこと」において、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。〔B(1)ウ〕
主体的に学習に取り組む態度
①粘り強く、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫したり情報を見付けたりし、学習の見通しをもって、意見文を書こうとしている。



## 第2時

### めあて「世界遺産を守るための意見文を読み合おう」

第1時で書いた意見文を友達と読み合い、自分の考えをよく伝えるために必要なことや学びたいことを話し合う活動を行った(写真3)。話し合いでは、自分の考えの根拠となる資料を多く集めることや、反論を想定して説得力のある再反論をすることが必要だという意見が多く出た。それは、児童の振り返りの記述からも分かる(図7)。今の力で意見文を書いたり、文章の課題を友達と話し合ったりしたことで、児童はその後の学習に見通しを持つことができていた。



写真3 意見文について話し合う児童

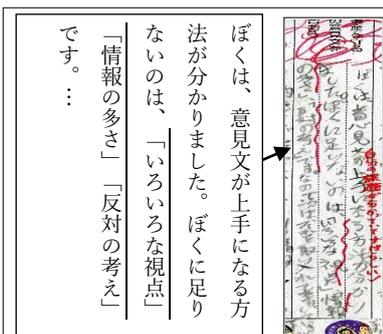


図7 第2時での児童の振り返りの記述

## 第6時

### めあて「白神山地を守るための意見文を推敲しよう」

第5時で書いた意見文を、友達と協働して推敲する活動を行った。教師が推敲の仕方を説明した後、児童は「自分の文章→友達の記事→自分の文章」の流れで推敲し、よりよい意見文について活発に話し合っていた。3色のサイドラインによって、多くの児童が言葉の意味や働き、使い方等に着目できていた(図8)。

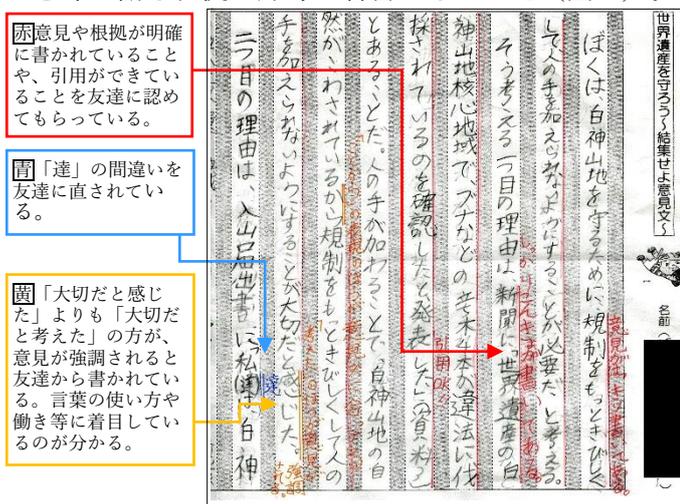


図8 3色のサイドラインで推敲した児童の意見文

## 第8時

### めあて「世界遺産を守るための意見文を改めて書こう」

第3～6時で習得した意見文の書き方を生かして、自分が選んだテーマ(世界遺産)で改めて意見文を書いた。意見文に用いる資料を「習得」段階で並行して集めていたため、どの児童もすぐに書き始めることができた。白神山地の意見文と同じ文章構成で、意見と事実を区別しながら、筋道の通った説得力のある文章を多くの児童が書くことができた。主述を整えること

や文末表現の区別は9割以上の児童ができていた。

## 第10時

### めあて「世界遺産を守るための意見文を読み合おう」

児童は自分が選んだテーマ(世界遺産)についての意見文を読み合い、互いの文章のよさを伝え、さらによりよい意見文にするにはどんな工夫が必要かを話し合った。そして、ポートフォリオの記述をもとに意見文の書き方を振り返って整理し、「意見文の書き方のポイント」として自分の言葉でシートにまとめた。この内容については、V成果3に記す。

## V 成果

### 1 書く意欲について

授業実践後、令和4年1月に国語科に関する意識調査を行った(表3)。

表3 国語科に関する意識調査 令和4年1月実施

質問項目	児童の回答
国語のどんな活動が好きですか。	書く 好き：62% 嫌い：38%
書く活動が好きな理由	○自分だけのテーマが楽しいから。 ○書いた文章を読み合うのが楽しいから。 ○考えが伝わると達成感があるから。
書く活動が嫌いな理由	△書くときに考えることが多いから。

その結果、書く活動について「好き」と答えた児童は62%となり、4月の結果と比べて大きく増加した。この「好き」と答えた児童は、0次で早くから書きたい内容を決め、情報を集めていた児童が多い。児童の書く意欲を高めるために、書く内容を見つける時間を確保したのは有効であったと考える。また、児童の理由から、固有のテーマで書く活動や友達と協働して推敲する活動等が、楽しさにつながったと推察する。

以上のことから、本研究の授業実践は、児童の「書く意欲」を高めることにつながったと考える。

### 2 書く技能について

授業実践では、「書くこと」に関する思考・判断・表現①の評価を行った。本単元では、自分の考えが伝わるようにするために、事実を客観的に示すこと、事実と感想・意見を関連させて提示すること、事実と感想・意見を文末表現によって明確に区別することが重要であると指導した。以上を踏まえ、次のような評価規準を作成し、児童が書いた意見文を基に評価を行った(表4)。

表4 思考・判断・表現①の評価規準

A	事実を羅列するだけでなく、事実から分かったことをまとめ、接続語を用いて、自分の意見を書いた文章につなげるなど、自分の考えがより伝わるように書いている場合
B	事実が感想・意見の裏付けとなっていて、文末表現が適切な場合
C	事実が感想・意見の裏付けとして不十分であったり、文末表現が不適切であったりした場合

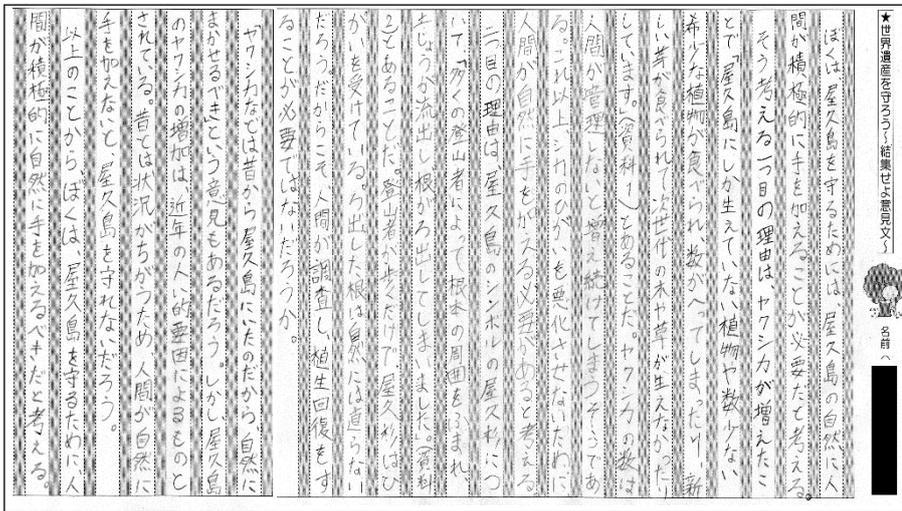


図9 A児が屋久島をテーマに書いた意見文

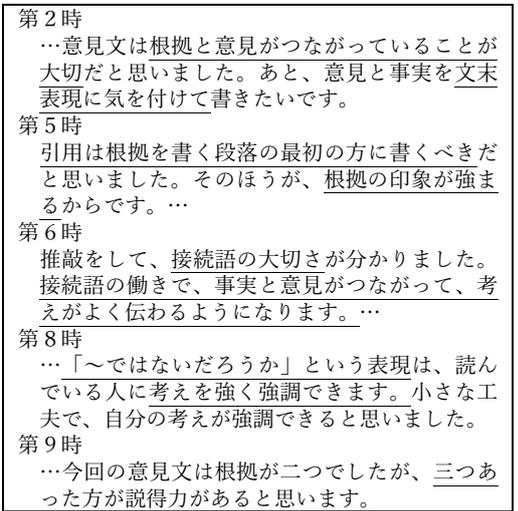


図10 A児の振り返りの記述

本稿では、日頃は書く活動に消極的で、学力調査等で書く力が標準的なA児を例に挙げる。A児は、屋久島を守るための意見文を書いていた(図9)。そして、①文末表現で事実と感想・意見を区別している、②資料の情報(事実)が、人間が自然に手を加えるべきという考え(意見)を裏付けている、③資料の情報(事実)を、接続語を用いて自分の考えを書いた文章につなげている、といった点からA評価とした。授業で学んだ意見文の書き方や工夫を生かし、自分のテーマで説得力のある意見文を書くことができていたと考える。さらに、学級のすべての児童がB以上の評価となった。これは、言葉や表現に着目し、意見文を3回書いた取組の成果だと考える。どの児童も、意見文を書くたびに自らの課題を自覚し、書き表し方を工夫できるようになっていった。

以上のことから、本研究の授業実践は、児童に意見文を書く力を身に付けさせ、書く技能を高めることにつながったと考える。

### 3 深い学びの視点から

A評価となったA児は、本研究が目指した深い学びができていたのかを考察する。A児の振り返りの記述を読むと、単元を通して考えがよく伝わる文章を探究していることが分かる(図10)。また、表現や言葉の働きに着目し、意見文の書き方を振り返っていることから、「言葉による見方・考え方」をよく働かせていることが分かる。さらに第10時には、ポートフォリオの記述をもとに一つ一つの授業の学びを結び付け、「意見文の書き方のポイント」として学んだ知識を構造化することができていた(図11)。

これらのことから、A児は意見文の書き方の学びを自覚し、深い学びができていたと考える。だからこそA児は、白神山地の意見文で学んだことを、自分のテーマの意見文でも生かすことができたのだと考える。他のA評価の児童にも、A児の学び方と同じような傾向が見られた。

以上のことから、本研究で目指した深い学びの視点での授業改善は、児童が学びを自覚して生かせるようにすることや書く技能を高めることにつながったと考える。

## VI 課題

まずは、知識の構造化について、どんな知識をどのような視点で結び付けるのかをより明確にする必要がある。今回の授業実践では、意見文の書き方に関する知識の構造化を図ったが、育成を目指す資質・能力や書く文種によって構造化が必要な知識は違うと考える。

また、単元の学習が長すぎることも課題である。今回の授業実践では、0次を含めると約1か月半の時間がかかっている。異なる文種で授業実践を繰り返し、短縮する方法を考えたい。

## VII おわりに

本研究では、児童の実態を踏まえ、「書く意欲」と「書く技能」を高めるための授業改善を行った。そのなかで、教師の本気が児童の本気につながる手応えを感じた。やはり教師は指導力を磨き続けるべきである。今後も児童と本気で向き合い、実践に励みたい。

### 引用・参考文献

- ◎文部科学省.(2018).『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』.東洋館
- ◎白坂洋一・香月正登(編著).(2020).「『子どもの論理』で創る国語の授業—書くこと—」.明治図書
- ◎細川太輔・大村幸子(編著).(2017).「深い学びを実現する!小学校国語科『習得・活用・探究』の学習過程を工夫した授業デザイン」.明治図書

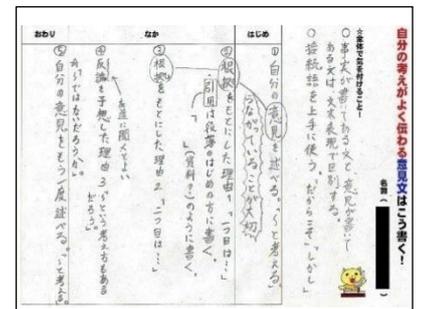


図11 A児が第10時でまとめた意見文の書き方